

「たたかう！ジャーナリスト宣言」
～ボクの観た本当の戦争～

著：志葉 玲 社会批評社：出版

本を読むきっかけは、8月にまちづくり講座へ来てもらう事になり、本を読んだ。

読むまでは、どちらかというと関心は薄かったように思う。しかし、本の内容を読むにつれて、信じられない事実が書かれていて、その事実を受入れて、今後に繋いで行きたいと実感した。特に、多くの子どもたちや女性も被害に遭っている事実には、言葉がつまる思いがした。1人でも多くの人に出会って欲しい内容だと思った。

この本が出版されたのは2007年なので、約10年前だが、紛争地の現状は今もあまり変わっていないように思う。

今の日本では、紛争地を取材するジャーナリストに対する見方は厳しい。しかし、身の危険を感じながらも、現状を伝えようとしてもらっている。だから、感謝しないとイケないのに、逆に「自己責任」と言われていることがおかしと思う。

本には、現地を取材しての様子などが細かく書かれていて、中でも米軍の現地住民や取材陣などへの対応にも、拘束と暴行の現実が記録されており、信じられない状況だった。

米軍は、表向きは支援としながらも、本当に信じられない事をしてきている。その米軍に、日本政府は支援をし続けてきているのだ。しかし、残念ながらその事実は報道されない。

時々、新聞等で米軍兵士や、日本の自衛隊員が自国へ帰ってから自殺したという残念な報道があるが、なぜ自殺を選ばなければならないのかが、この本には、その理由がわかる事実が記録されていた。

著者自身も、2003年3月に初めてイラクへ入ったが、6月にはスパイと間違われ捕虜になる。その時に米兵は「俺の気分次第で、お前をどうにでも出来ることを覚えておけ」とすごまれたそうだ。米兵の対応はひどいが、上官が居なくなる夜になると、急に優しくなる兵士もいたそうだ。

結局、捕虜になって80日でやっと解放された。

2004年にははじめてサマワへ行ったが、日本の自衛隊も支援に行っている。そこ



では、十分に水の給水が出来ていないなど、「自衛隊は何もしない」と、評判は悪かった。

結局、自衛隊の支援によって雇用はできたが、一時的な物で、根本的に解決したわけではなかった。教育・職業訓練・産業の育成など、自衛隊には荷が重すぎて、自衛隊の安全確保の為に、結局はばらまき支援によって、地元部族の欲をエスカレートさせ、腐敗の温床を作り地域社会の形を歪な物にしてしまうこともある。

結果的に、自衛隊の派遣は必要だったのか？要した費用に対しどれだけの支援が出来たのか？自衛隊以外の市民団体も高額な支援が継続されていて、イラク支援は自衛隊だけではない。

自衛隊派遣によって、反日感情が高まり、戦場での死者はなかったが、帰ってからの自殺者はこの時点でも6人いたのだ。その後も、日本人が誘拐されたり、殺害されるなどが続いた。

日本政府は、罪のないイラク市民を虐殺し続けてきた米軍やイラク内務省のために、何億・何兆もの税金を献上してきた。この事実を目を向けないといけない。

反米的なファルージャの総攻撃は、「思いやり予算」として日本から米軍基地のために提供されている。数千人もの民間人が犠牲になった。その被害調査はちゃんと行われたのか？

ビルマから来た美しい女性との出会いは、自分の歩む道を学ぶきっかけだったそうだ。彼女は「日本政府は『国際貢献』というが、救いを求めてきた難民達を拒絶する。」
「日本は平和国家じゃない」と彼女は言った。国民の税金を使って外国での圧制と虐殺に加担しているのだ。

世界の紛争と日本の関係は無関係ではない。今後の日本政府の憲法改正などの動きについても、このような現状をしっかりと見て、みんなで考えて行かないといけないと思う。